

国語（解答番号 1 45）

問題一 次の a・b・c・d・e の傍線部を漢字に改めた場合、カタカナ部分がこれと同じ漢字を用いるものを、次の中から一つずつ選べ。

- | | | |
|--|--|-----------------------|
| <p>a 親子の<u>カクシツ</u></p> <p>① シツセキを受ける</p> <p>④ 熊をイカクする</p> | <p>① 首相のシツム室</p> <p>⑤ 米をシュウカクする</p> | <p>③ シツカンの予防</p> |
| <p>b <u>ケン</u>才感をいただく</p> <p>① ケンジツな人柄</p> <p>④ 警察にケンキョされる</p> | <p>② ケントウを祈る</p> <p>⑤ ハケン社員になる</p> | <p>③ 犯罪のケンギがかけられる</p> |
| <p>c <u>フタン</u>を減らす</p> <p>① 名所をタンボウする</p> <p>④ 企業の経営ハタン</p> | <p>③ ダイタンな振る舞い</p> <p>⑤ タンカで運ばれる</p> | <p>③ 時間をタンシユクする</p> |
| <p>d ニュウネンに準備する</p> <p>① ニュウワな人柄</p> <p>④ ネンブツを唱える</p> | <p>② ニュウカ現象</p> <p>⑤ ネンリヨウが底を尽く</p> | <p>③ ネンザの治療</p> |
| <p>e 選挙の出馬要請を<u>コジ</u>する</p> <p>① シュクジを述べる</p> <p>④ ジョウ強壮によい菓草</p> | <p>⑤ ジミチな努力を重ねる</p> <p>⑤ 温泉場でトウジする</p> | <p>③ ムジヒな扱いを受ける</p> |

問題二 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ（段落末尾の数字は段落番号を示す）。

鳥は空を飛び回り、^{けもの}獣は野原を駆けめぐるというのに、人間はなんと窮屈に生きているのだろう。思い悩む日々があり、悲しみにうちひしがれる時があり、真の^ア愉悦は、まれにしかも束の間しか訪れてはこない。(1)

それは人間が言葉という禁断の果実を手に入れてしまったからだ。言葉なしでは生きられない存在となってしまった時から、意識は封印され、鳥や獣のように、その赴くままに直接に行動することはかなわなくなってしまった。(2)

意識こそが人間を行動に誘う原動力だというのに、言葉はそれを暗闇へと追い込んだ。人間の不幸の原因はここにある。(3)

言葉は語彙と文体から成る。山、海、机、電気スタンド、鉛筆……。世界は名づけられることによって切り取られる。言葉は一面で語彙の宇宙を形成する。(4)

^注
a、この語彙を引き出し、成り立たせている力が文体である。つけ加えれば、アルファベットの^イ西欧屈折語間の微差を説明するために生まれた文法は、文体の一部である。(5)

和語でいう「何となく」「何かしら」心が魅^ひかれるということがある。「気のりがする、しない」ということもある。(6)

生きて生活している人間には、気分や感情というものがあって、行動の大半はそれに従っている。厄介なことではあるが、人間ははまだ言語化されていない言葉以前の意識帯域をもつ。b、この気分や感情をも含む意識さえも人間においては、言葉（語彙と文体）によってつくられる。この意識帯域こそ

は、人間の行動を規定するエネルギーの源泉である。本人が気づいているような自覚された意識はすでに言葉の帯域に入り込んでいるのであって、たいして問題にすべきものではない。ここでの意識帯域とは、本人すら自覚することのない無自覚の意識帯域を指している。この無自覚の意識こそが、個人にとっての本心であり、この本人すら気づくことのない本心こそが、自らの行動を決定的に規定する。(7)

この茫漠^{ぼうぼく}たると言うべきか、ふつつつと煮えたぎるマグマのようなと言うべきか、変幻自在の闇のごとき、言葉と行動の源泉たる意識を、個人も社会も少しずつ明らかにするべく、言葉の帯域に押し出し、語彙と文体からなるXをつくり上げてきた。無意識を言葉に変えて、意識の明るみに出しつづけてきたのだ。その積畳が言葉から見た場合の歴史である。(8)

言葉のマグマたる無自覚の意識帯域と言語帯域との間には、境界、界面があると考えられる。発語——言葉を発するとは、意識の界面をゆらし、意識の中から言葉をひとつひとつ形づくっていくことである。(9)

物を書かんとする時に、何やらモヤモヤとした糸屑^{くすず}のごとき、あるいは粘稠^{ねんちゅう}状の「さわり」のようなものが、意識の薄暗い深層から浮かび上がってくる。それに形を与えんと、既存の語彙と文体を浴びせかけていく。それはちょうど忘れた人の名を思い出す時のような過程だと考えればいい。(10)

顔のイメージは浮かんでいるかのように思える。職業も、日頃の癖も思い出す。にもかかわらず名前が思い出せない。思い出せないと気が済まず、気持ちが悪くて仕方がない。そこで、「ア・イ・ウ……」と声を発して、どこかに名前の緒^{いと}がないか探しまわる。また他方では、平凡な名前だったとか、あるいは、

画数の少ない白っぽい字であったとか、四角ばった字ではなかったなどとその名を追い詰めていく。そして、「キ」の音でか、あるいは、「木」の文字が浮かんでか、「木原」だったと思いついた時に、一気に、本人の像が明解になり（なったように感じられ）、はればれと気がすむ（済む・澄む）のである。「木原」という名が思い浮かばなくても、当人は相手を持定しているのだから、別段、不都合はないにもかかわらず、言葉に宿命づけられた人間は、言葉にたどりつき、言葉で造形しない限り、気が霽れず気が澄まない。(11)

言葉が誕生しようとする時、意識の帯域は波立っている。不平——平らかならず、小波立ち、うねりを伴っている——、そして、不満——満ち足りず、何やら足らざる思いがある——、その波立つ意識に言葉を与え、光の下に引き上げることが、発語であり、書であり、文学である。むろんそれらが「小言」に漏れ、言葉にならずに「拗ね」で表現されるのでは未熟だが。(12)

これまで定義することもなく、意識という用語を用いてきた。感覚、想起、思惟などの心的作用を指してはいるが、ここでは主として言語との関連において扱っている。(13)

人間は言葉とともにある。否、言葉こそが人間だ。それゆえ、意識も言葉との関連なしでは生きられない。意識は言葉との緊張に誕生し、言葉と密接に関連づけられて存在しつづけている。(14)

意識は絶えず言葉に転移して行こうとする。意識とは、言葉に転移せんとする力の化体である。夢もまた、意識内部の出来事として考えるよりは、言葉を起こさんとする力、幻像が貼りついた言葉のいたずらであると解すれば、それで十分だ。(15)

意識の主宰者は、本人すら気づくことのない無自覚の意識である。これをフロイトの「無意識（超自我）」のように考えてもよいが、この無自覚の意識にも言葉が放射され、言葉に曝されている。「精神と肉体」と言い、「心と身体」と言う。c、肉体と言ひ、身体と言ったところで、これもまた言葉が放射され、言葉によって反転されているのであって、人間には鳥や獣と共通するような意識はほとんどない。〔中略〕(16)

フロイトに倣って、意識（自我）と前意識（エス）と無意識（超自我）を区分する必要はなく、前言語段階の意識は自覚された意識と無自覚の意識、つまり自覚ラインを設ける程度でよい。このYのベクトルに人間の生活や行動がある。意識も言葉との関連だけを問題にすれば十分である。(17)

その意味では、私の用いる意識を前言語と考えてもらってさしつかえない。(18)

言語は意識を離れられず、意識もまた言語から離れられない以上、言語との関連をぬきに意識について語ることはできない。言語と意識の関係はダイナミックなものだ。意識帯域でふと思いついた、たしかに言い切れたと思われた言葉が、声として発せられ、文字として書きとめられることがなかったがゆえに、再び意識の闇に沈んでいく。この時、たしかに言葉は口許に美しい言葉で生まれて来たかのように思える。だが、それは夢かもしれない。さもないければ、「言い切れる」と思ったはずの言葉が、いざ紙に向かうと、紙の上にさらさらと出現するどころか、いつこうに「言い切る」ことができずに四苦八苦するということがあるはずはない。

II 美しい言葉が口許に浮かんでいるという思い、おそらくそれは夢、幻覚、幻影なのだ。(19)

意識とは力の疎密、力の強弱に起因し、言葉もまた力の疎密と強弱から生まれる。本稿での「意識」とは、言語に曝された「前言語」と考えてもらいたい。(20)

言葉は生まれた瞬間がもっとも強く、美しく光り輝く。しばらくすると光を失い、暗闇に沈んでいく。言葉は無数の星の煌々、星空のように明滅する宇宙なのだ。(21)

意識が言葉の源泉であるが、いったん言葉が生まれると、その言葉が意識をつくり上げていく。(22)

たとえば、かけがえのない友人を失った時の悲しみは深い。[d]、その悲しみの意識もまた、「友の死」「悲しみ」「涙」「身のふるえ」「失意」などの言葉（語彙と文体）とともにある。その証拠にそれらの言葉を知らない幼児は、通夜の席で無邪気に走り回り、子供達はどうふるまったらよいものか、周囲の大人達の様子をうかがっているではないか。(23)

言葉とともにある人間においては、無自覚の意識さえも言葉に規定されている。(24)

悲しいから泣くのか、泣くから悲しいのかはともかく、泣くことと悲しむことは類縁をもった言葉、文体（スタイル）としてある。[e] 悲しみも度を超すと笑うしかないということもある。それとて、「泣く」という言葉の対極に「笑う」という言葉が存在しているから、「泣く」が「笑う」へと反転し、飛躍したものである。(25)

Ⅲ

とはいえ、意識は言葉をはみ出す領域をもっている。のみならず、言葉の周囲にその意識をねばつかせている。意識が言葉に変容し、意識帯域を出て、言語帯域に転じると、その空隙を埋めるかのように、今まで底の方に眠っていた意識が目覚め、頭をもたげてくる。その領域は無量大であるとも言える。(26)

このような機構で、人間はつぎつぎと言葉（意識と文体）を生みつつ、次第に無意識の領域を明るみに出し、原始から較べれば現在のような豊かな言葉と無意識をもつに至っている。また、その無自覚の意識の言語化の歴史とともに、社会も古代宗教社会から現代の社会へと姿を変えてきた。無意識を言葉に変えるはたらきが弱まらない限りは、人間は豊穡な言語と無意識領域を切り拓いていくことになる。(27)

意識と言葉の境界面にはたらくのが、「話す」ことであり「書く」こと、つまり発語である。「話す」と「書く」ことを通じて、意識は言葉に変わる。(28)

言葉は意識に根差し、言葉になりえなかった意識をその周辺に声や文字の書きぶりたる筆蝕の形でべっとり縛っている。書字＝文字の書きぶりには、言葉になりえなかった意識、つまり真の意味が未発のまま残っているのである。(29)

（石川九楊『見失った手 状況論』、ただし表現の一部を改変した。）

（注） 1 西欧屈折語……言語の類型論的分類の一つ。屈折とは、動詞や名詞などが文中での機能にしたがって異なるすがたを見せる、いわゆる活用や曲用のこと。

2 フロイト……ジークムント・フロイト（一八五六―一九三九）オーストリアの心理学者、精神科医。

問一 二重傍線部ア「愉悦」・イ「微差」・ウ「不満」と構成のしかたが同じ熟語として最も適切なものを、次の中から一つずつ選べ。同じ選択肢を繰り返し選んでもよい。

- | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ア | 6 | イ | 7 | ウ | 8 |
|---|---|---|---|---|---|
- ① 国営 ② 去就 ③ 解熱 ④ 非常 ⑤ 幽冥 ⑥ 農協 ⑦ 劇葉

問二 空欄 a・b・c・d・e に入ることばとして最も適切なものを、次の中から一つずつ選べ。

- | | |
|---|----|
| a | 9 |
| b | 10 |
| c | 11 |
| d | 12 |
| e | 13 |
- ① ① ① ① ①
 ② ② ② ② ②
 ③ ③ ③ ③ ③
 ④ ④ ④ ④ ④
 ⑤ ⑤ ⑤ ⑤ ⑤

問三 空欄 X に入ることばとして、本文の文脈上最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

- ① 意識帯域の偶像 ② 無意識の虚像 ③ 意識の根本 ④ 言葉の宇宙 ⑤ 表現の源泉

問四 空欄 Y に入ることばの組み合わせとして、本文の文脈上最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

- ① 前意識↓意識↓無意識
 ② 無自覚↓自覚↓言語
 ③ 無自覚↓言語↓自覚
 ④ 無意識↓前意識↓意識
 ⑤ 意識↓発語↓発声

問五 本文中のある段落の末尾から、次の文が脱落している。この文の入るべき最も適切な段落を、次の中から一つ選べ。

16

自覚された意識と行動がこれに沿っていけば快であり、反していれば不快を感じることになる。

- ① 第(7)段落 ② 第(9)段落 ③ 第(16)段落 ④ 第(17)段落 ⑤ 第(25)段落 ⑥ 第(26)段落

問六 波線部Ⅰ「意識とは、言葉に転移せんとする力の化体である」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

17

- ① 意識とは、語彙と文体の凝結として言語帯域に存在し、界面の揺れを引き起こす力であるということ
② 意識とは、ふつふつと煮えたぎるマグマのような変幻自在の闇のごときものであるということ
③ 意識とは、無自覚の意識帯域と言語帯域との間にある境界を融合させる力であるということ
④ 意識とは、前言語の意識帯域が界面を超えて語彙と文体の側へ転移しようとする力のはたらきであるということ
⑤ 意識とは、声や文字の書きぶりたる筆蝕に、べつとりと纏って残るものであるということ

問七 波線部Ⅱ「美しい言葉が口許に浮かんでいるという思い、おそらくそれは夢、幻覚、幻影なのだ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

18

- ① 考えていることがうまく頭の中でまとまっても、口に出そうとすると頭の中から消え去ってしまうということ
② 思考が美しい言葉として脳内でうまくまとまったという思いは、実のところ不確かでまぼろしのようなものであるということ
③ 脳裏に浮かぶ幻想や幻影を、口許で完成された言葉であらわしたとしても、たちどころに意識の闇に沈んでしまうということ
④ しっかりと言葉にまとめられていた思考が、口許で発した途端、たちまち幻のように消え去ってしまうということ
⑤ 口許に浮かぶ言葉はすでに完成形であり、紙にあらわせば必ず劣化して無意味になってしまうということ

問八 波線部Ⅲ「意識は言葉をはみ出す領域をもっている。のみならず、言葉の周囲にその意識をねばつかせている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

19

- ① 波立つ意識が言葉によって光のもとに引き上げられる際に、はみ出した部分が「小言」として漏れるということ
② 発語するにあたって言葉の外側にある意識が過剰に表出され、不快さをともなう誤解の源として残留すること
③ 意識が言葉を生み出すとき、常に言語で表現しきれない無意識の領域を伴い、言語表現にはそれが自ずから表れるということ
④ 意識が発語によって完全に表出されたあと、ねばついた意識が言外に残響として留まるということ
⑤ 言葉では言い表せない意識の部分がおのずから表現にあらわれ、ある種のしつこさを纏わせるということ

問九 本文の内容と合致しないものを、次の中から三つ選べ（解答欄 20 に三つマークせよ）。

- ① 意識帯域と言語帯域の間には境界があり、その界面をゆらすことで意識は言葉として形づくられる。
- ② 本人すら気づくことのない無自覚の意識こそが本心であり、自らの行動を規定するエネルギーの源泉である。
- ③ 人間を行動に誘う原動力として発語があり、言葉はそれを白日のもとに晒^{さら}して、語彙の宇宙を形成する。
- ④ 言葉と行動の源泉である無自覚の意識帯域は、ふつつつと煮えたぎるマグマのようなものである。
- ⑤ 気分や感情という無自覚の意識さえも、実際には言葉（語彙と文体）によって規定されている。
- ⑥ 意識は言葉との緊張のうえに誕生し、言葉と密接に関連づけられて存在しつづけている。
- ⑦ 人間の行動を規定するエネルギーの源は、言語化されていない言葉以前の意識帯域にある。
- ⑧ 意識と言語の間に明確な境界はなく、両者が一体化することで発語がなされ、書や文学が生み出される。
- ⑨ 意識は絶えず言葉に転移され、言葉は語彙と文体から成ることで、意識帯域の気分や感情をも表現することができる。